

## なよ竹のかぐや姫 現代語訳

左の現代語訳と教科書の本文を照らし合わせて、教科書の同じ位置に段落番号と／を書き入れなさい。

今となつては昔のことだが、／竹取の翁という者がいた。／翁は、野山に分け入つて竹を取つては、／様々な用途に使つていた。／その名は、讃岐の造と言うのだった。／（翁が取ろうとする）その竹の中に、／根元が光つている竹が一本あつたのだった。／翁が不思議に思つて近く寄つて見ると、／竹の筒の中が光つている。／それを見ると、三寸ほどの女の子が、／たいそうかわいらしい様子で座つている。／

翁が言うには、／「私が毎朝毎夕見ている竹の中に、／いらっしゃるから、分かつた。／私の子になりなさるに違ひない人のようだ。」／と言つて、手のひらにそつと入れて、／家に持ち帰つた。／妻のおばあさんに預けて養育させる。／かわいらしいこと、この上もない。／たいそう小さいので、竹の籠に入れて育てる。／

竹取の翁が竹を取ると、／この子を見付けてからというものを竹を取ること／節を隔てた空洞の部分ごとに、／黄金がつまつている竹を見つけることが度重なつた。／かくして翁はだんだん裕福になつていった。／

この幼子は、育てるうちに、／すくすくと、ぐんぐん大きくなつてくる。／三ヶ月くらいになるときには、／年ごろの女性のようになつたので、／翁は髪上げのことなどあれこれ準備して、／髪を結い上げさせ、裳を着せた。／室内のとばりの中から外へも出さないようにして、／大切に育てた。／この子の顔立ちが、／光り輝くばかりに美しいことは、世にまたとないほどで、／家の中は暗い所はなく、／明るく光が満ちわたつてゐる。／翁は、氣分が悪く苦しいときにも、／この子を見ると、苦しさが癒えた。／腹が立つことも慰んだのだった。／

翁は、（黄金の入つた）竹を取ることが永く続いた。／翁は財力豊かな富豪になつた。／この子がたいそう大きくなつたので、／（翁は）名前を御室戸斎部の秋田を呼んで、付けさせた。／秋田は、「なよ竹のかぐや姫」という名を付けた。／この間三日間、／翁は命名披露の酒宴を開き、歌舞管絃の遊びを続けた。／様々な歌舞音曲の数を尽くして遊んだことであつた。／世間の男をだれかれかまわず呼び集めて、／実際に盛大に遊んだのである。／

世の中の男は、／身分の高い者も低い者も、／みなこのかぐや姫を妻にしたいものだ／見てみたいものだと、／（その美しさの）評判を耳にして称賛し、思い乱れた。／